

明治中期の新潟県郷土雑誌と越後古図

堀 健彦

1 はじめに

『温古の栞』は、明治中期に刊行された新潟県最初の郷土雑誌である。¹ 明治二三年（一八九〇）二月に刊行が始まり、明治二六年一月に三六篇をもって完結している。発行主体は温古談話会と称し、その中心となっていたのは、大平与文^{おまたら}次なる人物であった。

『温古の栞』で取り上げられる対象は、三章（一）で示すように伝承・伝説から考古遺物に関することまで極めて多岐にわたっており、近世地誌的な問題関心のあり方を踏襲・発展したものであると考えて良い。

そして、関心の対象中には、筆者が数年来、資料調査を進めている越後古図と呼ばれる、近世後期に作成された古代の年紀を有する創作図も含まれていた。² 特に注意すべきは、三四篇の号外として、いわゆる康平三年（一〇六〇）の年紀を有する絵図が出版された点である（写真1）。

『温古の栞』あるいは温古談話会の学問水準については、資料の引用方法などの点で不十分な点が多いなどの批判も存在する。³ 新潟県出身の歴史地理学者、吉田東伍が『温古の栞』を一切、引用していないことや、『越佐史料』において、『温古の栞』からの引用は極めて限定的であることなども指摘されている。⁴

けれども、玉石混淆とも言える『温古の葉』の関心のあり方自体が、近世における地理的知識の体系化の成果である地誌との連続性を踏まえた上で、近代における歴史地理の生成過程の諸相をとらえていくための重要な資料ともなりうるだろう。⁵⁾

本稿では、越後古図についての検討を深めていく目的のもと、明治中期の郷土雑誌と越後古図の関係を多角的に明らかにしていきたい。第二章では、康平図の遺存状況について簡単に押さえ、温古談話会が出版した康平図の資料的価値を明らかにしたい。ついで、第三章では、温古談話会において越後古図がどのようにして関心の対象となってきたかを具体的に跡づける作業を行う。最後に第四章で、温古談話会により出版された越後古図が、その後の郷土研究に与えた影響を考察する。

なお、温古談話会を主宰した大平は、『温古の葉』終刊後、明治二六年から二七年にかけて隔週刊雑誌『越の寄ふみ』を二三号まで刊行した。さらに、明治二八年には、『越後風俗志』を八輯まで刊行している。⁶⁾けれども越後古図に関して、後続雑誌は『温古の葉』刊行期間中で完了できなかった絵図の出版とその告知を行っているのみである。そこで、後続雑誌については、古図の刊行事業についてふれるのみにしたい。

2 康平図の遺存状況と温古談話会刊行図の資料価値

絵図のカテゴリの一つである古図は、江戸・大坂・尾張などの沖積平野や、平泉や鎌倉などの歴史都市、大伽藍を構えていたが退転した寺院などの幅広い事物を対象とし、大量に残されている。これらの古図類は、近世において、過去を復原するという観点から作成されたことが指摘されている。⁷⁾

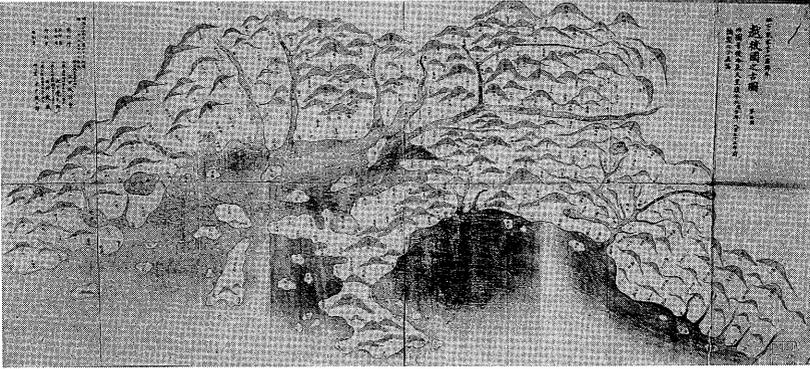


写真1 越後国之古図
 (『温古の葉』34篇号外：国立歴史民俗博物館蔵)

表1 康平図の書写年記載

表 題	書 写 年	所 蔵
越後国之全図	明治7 (1874) 以前	長岡市個人蔵
越後国之古図	明治30 (1897) ~ 昭和22 (1947) の間	長岡市立中央図書館
越後国古図 頸城郡一部	明治38 (1905)	上越市立高田図書館
越後国地図	昭和8 (1933)	新潟市立新津図書館
越後国地図	昭和38 (1963)	所在不明
越後国古絵図	昭和44 (1969)	荒川町公民館図書室
後冷泉天皇康平三庚年五月取調	記載なし	新潟市歴史博物館
後冷泉天皇康平三庚年五月取調	記載なし	新潟市新津図書館
越後国地図	記載なし	新潟市歴史文化課 (黒埼町史収集絵図)

※同一表題のものでも図像表現、所蔵者、書写年が異なっているものは個別に扱った

2008年1月までの筆者確認分

表2 寛治図の書写年記載

表題	書写年記載		所蔵
	題下	題下以外	
往昔越后州之図	文政10(1827)	弘化2(1845)	神戸市立博物館
往昔越後国之図	文政10	嘉永1(1848) 文久1(1861) 明治22(1889)	多和文庫
往昔越後国之図	文政10	安政3(1856)	新発田市立図書館
往昔越後国ノ絵図	文政10	万延1(1860)	新発田市立図書館
往昔越後国之図	文政10	文久3(1863)	上越市立高田図書館
越後国古絵図	天保13(1842)	文久4(1864)	新潟市歴史文化課(斎)
往昔越後国之図	文政10	元治1(1864)	筑波大学附属図書館
往昔越後国之図	文政10	明治15(1882)	明治大学図書館蔵田文庫
往昔越後国之図	文政10	[明治]17(1884)	明治大学図書館蔵田文庫
往昔越後国之図	文政10	明治19(1886) 大正12(1923) 昭和45(1970)	荒川町公民館図書室
往昔越後図		明治32(1899)	新潟大学人文学部
越後ノ国古図		明治37(1904)	国立国会図書館
往昔越後国之図	文政10	明治39(1906)	神戸市立博物館
往昔越後国之図	文政10		国立歴史民俗博物館
往昔越後国之図	文政10		新潟市歴史文化課(寄託)
往昔越後国之図	文政10		新潟市立新津図書館
往昔越後国之図	文政10		東京大学本居文庫
往昔越後国之図	文政10		新潟市歴史文化課(黒)
往昔越后国之図	文政10		新潟市歴史文化課(黒)
往昔越後国之図	文政10		鈴木牧之記念館
往昔越後国之図	文政10		新潟市歴史文化課(斎)
往昔越後国之図	文政10		新潟市立新津図書館
往昔越後国之図	文政10		上越市立高田図書館
往昔越後之図	文政10		新潟県立図書館
往昔越後国之図	文政10		東京大学史料編纂所
往昔越後国之図	文政10		新潟市歴史博物館
往昔越後国之図	天保7(1836)		新潟市歴史文化課(斎)
往昔越後国之図	天保7		新潟市歴史文化課(斎)
往昔越後国之図	天保7		国立公文書館
往昔越後図	天保9(1838)		東北大学附属図書館狩野文庫
往昔越後国之図	天保14(1843)		上越市立高田図書館
往昔越後国之図	天保14		上越市立高田図書館
往昔越後国之図	弘化2(1845)		国立歴史民俗博物館
越後国古絵図之写	明治21(1888)		新潟大学人文学部

※同一表題、同一所蔵のものでも図像表現、書写年などが異なる場合、個別に扱った空欄は記載がないことを示す

所蔵の新潟市歴史文化課(黒)は黒埼町史収集絵図、(斎)は斎藤秀平収集文書の略
2008年1月現在の筆者確認分

越後についても、筆者がこれまで確認したところでは、崇神朝の大彦命作成といわれる図（古国図）、永祚元年（九八九）の北越震動頃とされる図（後国図）、「越後国之古図」「越後国之全図」「越後国地図」などのタイトルをもつ康平三年の図（康平図）、「往昔越後国之図」などと称される寛治三年（一一〇八九）の年紀をもつ図（寛治図）など、多種多様な古図が存在している。

これらを、その図像表現から整理するならば、『北越風土記節解』所収の古国図および後国図系統の図と、康平図・寛治図系統の図とに大別することができる。『北越風土記節解』系統の二図は、日本海に多くの島々が浮かび、「ヤキ山」からは噴煙があがるような描写をしているのが特徴である。康平図・寛治図系統のものは、寺泊付近から日本海に半島が突出する一方で、信濃川河口部の蒲原平野が水域として表現されている。

四章でふれるように越後の郷土研究の歴史過程で、多くの注目を集めてきたのが、康平図・寛治図の系統であった。表1・2に筆者がこれまで確認した康平図・寛治図系統の写図をまとめた。康平図は寛治図に比べ確認点数が、かなり少ないことがうかがい知られる。

さらに、寛治図の書写年と康平図の書写年を比べると、文政一〇年（一一二七）という寛治図では、題下の文章中に定型化されている書写年を除いても、康平図の書写年の方がかなり新しい傾向が見て取れる。康平図は、寛治図よりも後代、おそらくは江戸末期に作成された可能性を想定できよう。

現在、確認することができる越後古図は手写によるものが多い。手写の場合、親図の所蔵者と謄写・模写者との間の交友関係が前提となる。それに対して、出版の場合、不特定多数への情報の流布が可能であり、異なった観点からとらえていく必要がある。

筆者がこれまでに確認した康平図・寛治図のうち、出版物に掲載された図を表3に、古図単体で出版されたものを表4

表3 出版物に掲載された康平図・寛治図

表題	区別	掲載書誌名	発行年	出版地 (現在)
往昔越後略図	寛治	越後土産 初編	元治1(1864)	
記載なし	寛治	新潟沿革図	明治13(1880)	新潟市
越佐古昔略図	寛治	日本名蹟図誌	明治35(1902)	名古屋
往昔越後国之図	寛治	大日本地誌	明治39(1906)	東京
後冷泉天皇康平三庚子年五月取調	康平	郷土史概論	大正10(1921)	笹岡村 (阿賀野市)
寛治三年七月越後絵図	寛治			
越後国地図	康平	深才郷土誌	昭和4(1929)	深才村 (長岡市)
越後国之古図	康平	内務省新潟土木事務所沿革卜其事業	昭和5(1930)	新潟市
康平三年五月越後古図	康平	新潟市史 上	昭和9(1934)	新潟市
寛治三年七月越後絵図	寛治			
康平三年五月越後古図	康平	史蹟名勝天然紀念物調査報告7	昭和12(1937)	新潟市
往昔越後国之図	寛治			
寛治三年七月越後絵図	寛治	白根郷治水史	昭和20(1945)	白根町 (新潟市)

※昭和20年まで、筆者確認分(2008年1月現在)

表4 単体で出版された康平図系統の図

表題	区別	出版者	発行年	出版地 (現在)
越後国之古図	康平	温古談話会	明治25(1892)	長岡町 (長岡市)
越後古図 九百八十五年前	その他	桜井和吉	大正2(1913)	湯之谷村 (魚沼市)

※昭和20年まで、筆者確認分(2008年1月現在)

に掲げた。最初に越後古図を掲載した出版物は、紀興之作成の一般向け地誌書『越後土産』で、元治元年（一八六四）のことであった。寛治図を簡略化した「往昔越後略図」と題する図が掲載された。これと同系統の図は明治一三年出版の『新潟沿革図』中でも引用されている。

温古談話会が刊行した康平図は、これらに次ぐ位置を占める。筆者が各地の所蔵機関等で確認したところでは、本誌とは別個のものとして整理されることや、単体で流布することも多かつたようである。⁸ 本誌と号外では発行年が異なっているものも見られることや、号外自体にもタイトルが付いていることも、単体として流布する背景要因となっていたと考えられよう。¹⁰

3 温古談話会における越後古図の探求

本章では、温古談話会において越後古図がいかにして関心の対象となってきたかを、『温古の栞』などの雑誌記事を引用して、描写していきたい。

(1) 温古の栞の問題関心

温古談話会を主宰した大平与文次は天保一〇年（一八三九）、旧三島郡浦村の庄屋の長男として生まれた。長岡に出て新聞経営に携わったが、事業の失敗に伴い膨大な負債を負うことになった。¹¹ 『温古の栞』を実際に執筆していたのは大平与文次であったが、編集および発行人の名義が息子の大平覚太郎となっているのはそのためであると言われる。¹²

明治一五年に越後の郷土研究を志す同志を募り、温古談話会を組織したが、精力的に会活動に傾注した結果、三〇〇人

近い会員を集めるほどになった。¹³ 本誌に掲載された会員名簿からは、中越地域を中心に会員が分布していたことが読み取れる。

井上慶隆は、大平が新潟新聞の通信者であり、明治一六年七月から古城跡の記事、明治一六年一二月から「温古談話会の筆記」が断続的に掲載されていることを指摘し、その好評が『温古の栞』の発行という事業を促したとしている。¹⁴

『温古の栞』初篇に掲載された「温古の栞発兌の主意」によれば、温古談話会の設立目的は「当国の地理・人情・衣食住及び其就業用具の沿革・荘郷村落の変遷・方言・古俚歌の由来・神社仏閣・名勝地・古城跡・旧家の去就・古書器の保存若くは国産盛衰の起因を探究」¹⁵ することにあつた。

取り扱う項目は、当初、「沿革の部」「神社仏閣の部」「名所旧跡の部」「古城跡の部」「物の起原の部」「名家去就の部」といったものから始まり、会員間の質疑の場である「温古学問答の部」がしばらくして加わった。さらに、刊行が進んでいく中で、「産物の部」「習慣の部」「偉人の伝」「古書器の部」「民間必要の部」などが項目として新たに加わっている。これ以外にも「国内町村読方一覧」「社中詠草」「寄稿」「投書の部」「詞林の部」「草木考」などの項目がある。このような、多種多様な関心のありよう、および項目の配列順は、近世地誌の体裁とも共通性が高い。¹⁶

(2) 寛治図への言及

『温古の栞』における越後古図への言及は、地域のあらましを概説する「沿革の部」から始まった。

- ① 西蒲原郡弥彦村本間家・古志郡渡沢村岸家等に蔵する越後絵図は頗ぶる古雅を帯び、紙面六尺四方、同一のものにして、地形今と異なり（次篇の付録に添ふべし）、其頭書に（下略）

①の引用文以降では、寛治図中の境域記載につづき、「元禄十五年公製御国絵図」の境域記載が記されており、越後七郡の境域を述べる際の一資料として、寛治図の頭書部分引用されたことが分かる。

「地形今と異な」という寛治図の絵画的表現の特徴については、「頗る古雅を帯び」と評価し、「次篇の付録に添ふべし」としている。

先述したとおり、付録・号外については本誌と異なり、遺存状況の全容を掴むことは困難な状況にある。寛治図については、『温古の栞』に関係すると思われるものは管見の限り存在しておらず、出版されたか否かは明らかでない。

(3) 内藤弥と「温古学問答」

つづいて、『温古の栞』の「温古学問答の部」で、越後古図について言及したのは、内藤弥であった。内藤は現在の出雲崎町舟橋の人で、温古談話会の活動に積極的に関わっていた人物の一人であった。『温古の栞』誌上で、私設図書館建設の企画を広告するなど、書籍の収集に積極的であった。小林存が「複本『温古の栞』解題」において、星山貢の伝聞を記すところでは、大平与文次の蔵書を引き継いだ人物であることが知られる。¹⁷

② 当国古絵図の中に沿海より少し山添に方り平野の里と云あり。今は何れの地方に当るや。又佐渡国との間に無数の小島相見ゆる中には名を附せし島もあるべし。問ふ、其名称等如何。

内藤 弥

『温古の栞』 一四篇（明治二四年三月）

③ 新潟県有志教育雑誌第五十七号付録に越後国の古図あり。右は一目して其真偽如何を分つに苦しむ。彼の原材は何れより得られしものなるにや、敢て問。 内藤 弥

『温古の栞』一六篇（明治二四年五月）

④ 温古の栞第十六篇問答の部に、新潟県有志教育雑誌第五十七号付録に、越後国の古図あり。内藤弥氏に於て彼の原材の出所を問はる。此は西頸城郡奴奈川村磯野為邦氏の所蔵品を模写せし者なりと。西蒲原郡上和納 伊藤左 武郎

『温古の栞』二一篇（明治二四年一〇月）

内藤が②で問題としている古絵図とは何だったのか。「平野の里」という記載と、佐渡との間に無数の小島が描かれていることからみて、『北越風土記節解』所収の古国図と称される古図であったと考えられる。

それに対して、③および④で問題とされている古図については、現在のところ不明である。よって、②で問題としている古図と、③④の古図とが同一であるかという点も定かでない。

ここでは、①で言及された弥彦村本間家、渡沢村岸家も含めて、奴奈川村磯野家などの諸家に伝来する古図が、温古談話会のネットワーク上で捕捉されていること、温古談話会の活動に積極的に関わりをもつ人物の関心を引きつつあったことを確認しておきたい。

(4) 種々の越後古図の探索

内藤の熱心な探求をうけてか、『温古の栞』誌上でも、越後に関する古図の探索に関する記事が増えていくようになる。

⑤ 斎藤家の越後古絵図

西蒲原郡角田浜村の旧家斎藤氏方には、今を去る千二百年前度、当国の地形を図せしものと、降つて六百年前度、之れを潤色せしものとを伝来す。其沿革の如何等は次篇に詳細著述すべし。

『温古の栞』一八篇「古書器の部」(明治二四年七月)

⑥ 越後国絵図

世間に流布する越後国の古絵図と云ふは、寛治三巳年七月(八百四年前)源頼綱(一書に源義綱とあり)の臣三郎兵衛信慶調製の物と、応永二亥年五月(四百九十八年前)上杉房方国守の砌り調製の物と、永祿二未年(三十三四年前)上杉謙信の命に依り宇佐美定満調製の物(以上稀に所蔵するものあれど逐次転写の誤り、或は私見を加へし物にや、間々当時に照し信憑を置がたき所あり、此は当会に於て専ら真図搜索中なれば、不日付録として発刊すべし)杯、公に伝はりし物は、慶長三戌年上杉家会津へ徒封の節、幾分か紛失せしものと思はる(下略)

『温古の栞』三〇篇「沿革の部」(明治二五年七月)

⑤の斎藤家伝来の絵図は、一二〇〇年前のものと六〇〇年前の二種である。前者は七世紀、後者は一三世紀の絵図とい

うことになり、康平図・寛治図、『北越風土記節解』所収の古国図・後国図ともに年代が一致しない。

⑥では、一二世紀の寛治図に加え、一四世紀上杉房方の時期の絵図、一六世紀上杉謙信の時期の絵図という三種についてふれている。

⑤および⑥であげられた古図については、不分明なものが多い。けれども、注意したいのは、⑥中で、寛治図、上杉房方の図、上杉謙信の図のいずれもが、転写の誤りや私見を加えた部分、信憑性に欠く部分があるという評価が下されている点である。

それでは、いかなる図が最も良き図であったのだろうか。

温古談話会が、越後の古態を示す図の中で最も信頼できる図としたのは、「越後国之古図」の題をもつ康平図であった。

(5) 康平図の出版

『温古の栞』は好評を博しながらも三六篇で終刊することが決定されていた。よって、付録としての越後古図の出版は、本誌の終刊間際の時期に進められていくことになった。

⑦ 曩に予告せし如く、当会に於て、主任大平与文次、及び補助伊藤左武郎・西村弥七郎・星野道太郎・戸井田求・小川善一郎・片野快颯・竹下栄・内藤弥・村山禎治・野上修平・大平伝七郎・山本比呂岐・松永嘉平・近藤岱三等諸氏の協力勉勵搜採ありし越後古絵図、真正の物大方整理し、次項に記載の通り出版する事とせり。其図面の如き、是れまで世間に流布せし物の比にあらず。且つ地名の証左を有せり。

(中略)

第一図 今を去る凡八百年前の物 本年十月十五日発兌

第二図 同上凡五百年前の物 同十一月十五日発兌

第三図 同上凡三百年前の物 同十二月十五日発兌

但し何れも上奉書紙彩色入にて調製す。

(中略)

明治廿五年九月十五日

温古談話会

『温古の葉』三三篇(明治二五年九月)

⑧ 第三拾二篇に広告せし越後古絵図、頗る細密を要する為に延期して、第一図は十一月十五日、第二図は十二月十五日、第三図は来廿六年一月十五日発兌す。

『温古の葉』三三篇(明治二五年一〇月)

⑦および⑧は会告である。⑦には協力者の名前が列挙されているが、前節で越後古図について問答を行っていた内藤弥と伊藤左武郎の二名も関わっていることがわかる。

古図のものに関しては、注意すべき点は、⑥と同様に「真正の物」を求めるといふ姿勢が明記されている点である。そして、その結果として、三つの図を出版する計画を打ち出している。すなわち、八〇〇年前の物は康平図、五〇〇年前の物は一四世紀上杉房方の図、三〇〇年前の物は、一六世紀上杉謙信の図にあたらう。

ただし、⑧にあるごとく、この計画は順調に進んだわけではなく、当初から一ヶ月繰り延べとなっている。

『温古の栞』第三四篇号外「越後国之古図」として、康平図が刊行されたのは、⑨の会告が示すように、明治二五年一月二三日のことであった。

⑨ 越後古絵図 第一図

右は本月廿三日出版す。御熟覽あらん事を請ふ。

『温古の栞』三四篇（明治二五年一月）

⑩ 寛治六申年九月、当国の海大に荒れ、角田山より西北の方、大越（当時の北陸街道）・折戸浜・古潟・蒲津・鳴戸浦・長浜・立間・外立間・大浦・吉津・内羽見・内郷・中郷・外郷・榎木島・上浜・下浜・松浜・北見・沖見の浜浦及び日山・砂山・飛山等、数十万項の地を打壊し、其土砂は乘足島以南の入海に注入せり。此時人畜の死傷数知れざりし由、関矢凌雲の越後風土考にも見え、且つ稀世に伝はりし康平三子年（寛治六年より卅二年前）調製の国絵図に照して明らかなり。八百年後の今其場所を望見すれば、千尋の海と変し、戦慄慘愴の感情に堪ざらしむる処なり。

『温古の栞』三四篇「名所旧跡の部」（明治二五年一月）

⑨と⑩は康平図を付録とした三四篇の本編からの引用である。⑨では、出版を告知し熟覽を請うている。⑩では「寛治の没地」というタイトルのもと、寛治六年に水没した地域について、「稀世に伝はりし」と賞される康平図、および関谷凌雲の『越後風土考』に基づいて述べられている。なお、明治二八年から刊行された『越後風俗志』にも⑩と類似の記述

がみられる。

(6) 歴史地図帳への志向性

すでに⑦の引用文中に見えるように、温古談話会の構想する越後古図の出版計画は、複数枚の地図を刊行するものであった。

- ⑪ 越後国古絵図第二図以下の義は、御保存の便利を計り、更にきりつき図と致し、来一月より逐次出版、温古の葉続々御覽被下候御方へ進呈可仕候。

『温古の葉』三五篇（明治二五年一二月）

⑫ 越後国古図 第二図

右は古志・三島・魚沼・岩船等各郡の調査は既に相整候得共、頸城郡岡田荘・刈羽郡鯖石荘・蒲原郡小川荘・弥彦荘内に未整の場所あり。故に目下勉強踏査中なれば不日出版して前約を徹すべし。（下略）

『越の寄ふみ』第一号（明治二六年二月）

第二図以降の出版については、『温古の葉』終刊に間に合わないことが、⑪の会告で述べられた。

事業のその後の展開は、大平が『温古の葉』に続いて発行した雑誌である『越の寄ふみ』誌上で追うことができる。⑫と同じ告知は別号にも掲載されている。越後国古図の出版が、一部地域の調査が未了のため、遅れ続けていることが分か

る。大平は、県内各地をめぐる資料調査や郷土史研究者との懇話を実施していることが会誌から知られる。絵図の刊行にあたっては、入念な調査を行った上で校訂作業を進めていたと思われる。

⑬ 本号には兼て御約束申せし如く、越後国之古図第二図の其一を掲げました。尤も是は追々出版いたす物につき、連続の上は順次綴り合して全図となさるへし。

『越の寄ふみ』第五号（明治二六年四月）

⑭ 本号には越後国の古絵図第二図の其一を付録とせり

『越の寄ふみ』第六号（明治二六年四月）

⑮ 曩に越の寄文第六号の付録とせし越後国之古図第二図（応永二十二年調製のもの）其一是、当会に於て引受、其二図よりは追々梓に上せ、完結為致候筈。就ては其一図御入用の方は、郵券二銭相添御申越あれは郵送可仕候。

『越後風俗志』第二輯（明治二八年五月）

⑬と⑭は、同一図の出版に関する告知である。⑮から『越の寄ふみ』第六号の付録であったこと、応永年間の図であったことが分かる。⑮では応永二二年（一四一五）となっているが、⑥にある応永二年の誤りであるのか、別図であるのかは、該当する絵図を今のところ見いだし得ておらず、判断としない。

第二図其二以降の続刊の状況については、⑮や次の『越の寄ふみ』第一八号などの告知文から知られる。

⑯ 越後沿革図第二図の続、月一回宛付録として出版可仕の処、主任大平与文次事越後名所図繪編纂の儀に付、繁雜のま、大に延引いたし候。此度其二其三とも梓に上せ候間、約の如く追々付録として出版可仕候。

『越の寄ふみ』第一八号（明治二六年一〇月）

大平が『越後名所図繪』編纂に注力していること、そのため第二図の其二及び其三は、当初、続いて毎月出版する予定であったが、途絶してしまつたことが分かる。『越の寄ふみ』は、詩歌・俳諧などの投稿を精力的に受け付けており、名所図会の刊行事業は、その延長上で企画されたのだろう。大平は明治二九年に亡くなつており、歴史地図帳としての越後古図の刊行は完結しなかつたと考えられる。

このような複数枚の古地図をとり合わせて、景観変化を示そうとする歴史地図帳は、古くは浪速古図などの他地域の古図でも確認できる形式である。¹⁸越後古図でも、東北大学附属図書館の狩野文庫のものは、寛治（一一世紀後半）、文龜（一六世紀初）、天正（一六世紀末）、寛文（一七世紀後半）の年紀の図を一組として、天保九年（一八三八）に作成されている。温古談話会の計画でも、これらと同様に、複数枚の絵図を「きりつぎ図」として一冊におさめることで、地域の継起的な変化を視覚的に提示しようとする思考が示されていたことに注意したい。

4 郷土雑誌『温古の葉』の歴史的位置

本章では、明治二〇年代の郷土雑誌である『温古の葉』が、越後の郷土研究に与えた影響について、越後古図を切り口として押さえていきたい。

(1) 康平図出版が与えた影響

温古談話会が刊行した越後古図のうち、最も広い範囲で流布したのは、三四篇号外の康平図であろう。雑誌の号外として出版されたことは、より多くの人々が越後古図の存在を知る契機となった。例えば、上越市高田図書館所蔵の写図「越後国古図 頸城郡一部」は、「東京図書館温古栞二録スル処」の康平図を「直江津今町住片田氏」が写し取り保存していた物をさらに、花田直道が「当郡歴史ノ為ニ写シ」たものであった。「温古の栞」三四篇号外として出版された康平図が、東京を経由し上越地域において受容されていることが知られる。

長岡市の互尊文庫には、昭和五〇年(一九七五)に寄贈された青焼きの康平図が存在する。そこには、「越後国之古図 此図後冷泉大皇康平三庚子年調製 帝国図書館摹写」と記される。東京図書館は明治一三年から明治三〇年まで、帝国図書館は明治三〇年から昭和二二年まで存在した現在の上野公園内に設けられた図書館で、現在、蔵書は国立国会図書館に引き継がれている。

また、新潟市新津図書館には、軸装された青焼きの康平図が残されている。いつ頃のものであるかは不明だが、親図は、温古談話会刊行の康平図であることは明らかである。

寛治図より古い年紀を持ち、「当時政治上、信仰上重要缺く可らざる式内神社及郷名に誤謬脱漏ある」こと、「当時所在の有無明瞭ならざる地名、若し存在せりとせば極めて微々たる可かりし地名を記す」といった寛治図の不自然な点が解消されていた康平図の刊行は、県内の郷土史研究者の関心をひいたと推測できよう。

その一方で新潟県以外に目を転じると、名古屋で明治三五年に出版された地誌書には、「越後土産」に掲載された「往昔越後略図」と類似した表現をもつ「越佐古昔略図」が掲載された²⁰。また、明治三九年に東京で出版された山崎直方・佐藤伝蔵編『大日本地誌 卷五』の第一編第一章地形の項目では、寛治図が掲載された。

明治三〇年代には、東京や名古屋で刊行された地誌書においては寛治図が引用されているものの、康平図は認識されていない。これは、より新しい時期に創作されたと考えられる康平図は未だ広範には知られていなかったためであると思われる。東京の有力図書館に納められていたものの、関心を抱くのは新潟県に縁をもつ者が中心であったと考えられよう。

大正・昭和初期に入ると、大木金平や池田雨工ら新潟県在住者による郷土研究の中で、康平図および寛治図が、古代越後の歴史を考える上での基本資料として、並列する形で言及されるようになってくる。

明治中期に、吉田東伍は寛治図のみを取りあげて、それが偽作であることを強く主張しているが、大木は吉田の見解を否定した上で、二枚の古代地図を信頼した上で議論を組み立てようとしている。池田雨工は、康平図の方に依拠しながら越後古代史を考えようとしているが、著書の第一〇章は「康平寛治の古代地図」と題されており、康平図と寛治図という二つの絵図を並べて検討の俎上にあげている点では共通している。

康平図は、現在、確認できる点数はそれほど多くないが、『温古の葉』に関係するものを除くとさらに少なくなる。にもかかわらず、大正期の郷土研究において、大量に手写図が残されている寛治図と組になるような形で、古代越後史を考える基礎資料としてとらえられ、吟味されていることは興味深い。

すなわち、康平図が郷土研究において重要視された理由として、温古談話会による出版とその流布が大きな役割を果たしたのではないだろうか。

(2) 昭和一〇年代における『温古の葉』の復刻をめぐる

大正から昭和初期が、日本において、郷土研究と呼ばれる、地域史研究の一大興隆期であったことは広く知られている。²⁴ その潮流の中で『温古の葉』本誌自体も注目を集めることになった。昭和一一年から一二年にかけて復刻された『温古の

葉」には、相馬御風の序文と、小林存の解題が加えられている。

相馬御風の序文では、昭和一〇年代における全国的な郷土研究の盛り上がりにつれ、この折りに、「郷土研究雑誌のいみじき先駆を成した「越後志料・温古之葉」の復刊を祝している。さらに、明治二〇年代に中学校に通っていた相馬は、自らが学んだ糸魚川尋常小学校および糸魚川高等小学校において、歴史の授業が、学年が進むに従って、町の歴史、郡の歴史、それから越後の歴史というように、順々に範囲が広がられていったこと、その背後には、郷土研究の先覚者である中川直賢がいたからであると推測している。

解題において、小林は「温古の葉」のみ特に左様いふ破格的な取扱ひを受けるのは、単に印刷会当事者諸君の郷土愛の熱烈なる好奇心によるばかりでなく、本誌各冊の内容自体が通観的に頗る根拠正しく、しかも往々創見に富み、後人の参考に資するところ極めて多いからである」と述べている。小林存は高志社を主宰し、昭和一〇年一月に会誌『高志路』を刊行した人物であり、新潟県の民俗学界を長らく主導した人物であった。小林は、自らの学問の淵源を柳田国男の民俗学に求める一方で、大平の温古学にもその源を有していたことを明確に述べていた。²⁶日本民俗学の確立に大きな役割を果たした柳田国男が、大正・昭和初期の郷土教育・郷土研究という思潮と関わりをもっていたことは周知の事実である。²⁷小林も、戦前期の『高志路』誌上で、しばしば郷土教育・郷土研究を問題として取り上げており、『温古の葉』の取り組みを、郷土研究・郷土教育という枠組みからも評価されるべき対象としてとらえていたと考えられる。

(3) 昭和初期における越後古図をめぐる議論

星山貢は昭和一〇年前後の郷土研究の盛行について、「こゝ、数年の郷土史研究の勃興は、文化文政の北越雑記、越後野志、佐渡風土記、越後地名考時代と、明治二十三年大平与文治の温古葉を唱導とした数年間とに對比して考へらるべきも

の」との認識を示している。²⁹

温古談話会で越後古図に多大な関心が寄せられていったように、昭和一〇年前後の郷土研究においても、越後古図をめぐる議論が活発化していく。

昭和四年の『深才郷土誌』³⁰には康平図が添付され、昭和五年の『内務省新潟土木事務所沿革ト其事業』³¹では信憑性を留保しながらも、付図として採用している。

さらに、康平図と寛治図の真偽については、昭和九年の旧版『新潟市史』、昭和一〇年から翌一一年にわたって討論がかわされた雑誌『高志路』、昭和一二年の『史蹟名勝天然紀念物調査報告 第七巻』というように、比較的短い期間に取り上げられている。

一連の口火を切ることになった『新潟市史』においては、越後古図を「後代の偽作にして、信すべからざる点甚だ多し」と述べて、徹底的に批判している。

ついで雑誌『高志路』上でも、創刊直後の昭和一〇年から、越後古図の真偽が討議されている。すなわち、高志路会二月例会では、「康平寛治の古地図の価値」が話題となり、³²新潟県立図書館長である村島靖雄が「寛治偽図の作者と製作年代」と題する論考を寄稿した。³³新発田中学教諭の金塚友之丞が、「康平寛治図偽作論（上）（中）（下）」などと題して、偽作論の立場から詳細に論じている。³⁴これに対して『郷土史概論』の著者である大木金平が同じく『高志路』誌上に「康平寛治図は果して偽作なるか（一）（二）」という文章を寄せて、偽作論に対して抗弁している。³⁵

さらに、斎藤秀平が、『史蹟名勝天然紀念物調査報告 第七巻』において、古国図・康平図・寛治図などのトレース図を掲載した上で論じている。³⁶第七巻は、「新潟縣に於ける石器時代遺蹟調査報告」であるにも関わらず、越後古図について頁を割いて論じているのは、越後古図の主題が、遺跡・遺物と関係が深い越後平野の地形環境に関するものであるだけ

ではなく、数年来の論争を踏まえてのことであると推測される。

このような盛り上がりはその後、どうなったのだろうか。それを象徴的に示すものとして、第二次世界大戦後の小林存の著書『縣内地名新考』を繙きたい。³⁷地名論についての論考であるが、康平図・寛治図を無視しうるものであることを断っておくため、①大きな内湾を埋める要因についての疑念、②作者についての疑念、③大津波直前という絵図の年紀に対する批判、④絵図に見える地名についての批判を行っており、「両地図は全然誰か専門家の心あつての偽作と断じている」と述べる。越後古図は、第二次世界大戦後の郷土研究の退潮・変化と軌を一にする形で、歴史研究の表舞台から消え去っていったと言えるだろう。

5 おわりに

本稿では、康平図が広く周知されるにあたって、温古談話会発行の『温古の葉』三四篇号外の「越後国之古図」が大きな役割を果たしたことを明らかにしてきた。さらに、温古談話会が計画していた越後古図から構成される歴史地図帳の刊行計画についても言及し、その思考の普遍性を指摘した。

大正期の郷土研究書、および昭和初期の越後古図をめぐる論争において不可分なものとして扱われてきた康平図と寛治図という二枚の越後古図の組み合わせは、必ずしも自明ではなく、温古談話会によって、康平図が大々的に紹介されたことが重要な契機であったと考えられる。

今後、これを基礎として、寛治図・康平図の伝来、および創作をめぐる諸問題について検討を進めたい。

(注記)

- 1 鶴巻武則「明治20年代における郷土史研究雑誌」『新潟県立新潟図書館報』一六 一九八一
- 2 拙稿「越後古図の諸類型」『高志の城柵の総合的研究調査成果報告書』平成一七年度新潟大学人文社会・教育科学系長裁量経費プロジェクト研究 研究成果報告書 二〇〇六、拙稿「越後古図に関する歴史地理学的検討―類型化と系譜関係の推定を中心に―」『浅層地質歴史学の創造』平成一六年度新潟大学学長裁量経費プロジェクト研究 研究成果報告書 二〇〇五など
- 3 星山貢「明治二十年代の郷土雑誌」『高志路』四〇 一九三八」は、温古談話会が出版した雑誌である「温古の栞」「越の寄ふみ」『越後風俗志』について、時代が下る雑誌の方が、記事の出典を記すなど、史的程度の点で向上が見られると評している。
- 4 井上慶隆「温古の栞の先後をさぐる」『高志路』三五〇 二〇〇三
- 5 筆者は、同様の問題意識から、一九世紀初めに越後で作成された地図・地誌・図絵からなる著作に注目し、検討を行っている。拙稿「三輪長泰『改正越後国佐渡国全図並附録』について」『資料科学研究』四 二〇〇七
- 6 前掲(1)
- 7 ①上杉和史「近世における浪速古図の複製と受容」『史林』八五―二 二〇〇二、②瀬田勝哉「伏見古図」の呪縛」『武蔵大学人文学会雑誌』三一―三 二〇〇〇など
- 8 『温古の栞』は、一九三六―一九三七年の温古の栞刊行会、一九七三年の野島出版、一九七七年の歴史図書館社と、三度にわたり復刻されている。特に歴史図書館社の復刻では、付録の幾つかも収められている点で貴重である。けれども、筆者が確認している三四篇付録の康平図や、一九篇付録の「越後石油脈の略図」は収められていない。
- 9 一九篇付録「越後石油脈の略図」の出版年は、明治二五年七月二二日であり、一九篇本編の刊行日である明治二四年八月とは大きく異なっている。
- 10 例えば、国会図書館では、「温古の栞」本誌とは別立てとして、「康平年間 越後国の古図」の外題が付けられ所蔵されている。柏崎市立図書館の中村文庫に収められた「越後国之古図」は、「康平三年越後地図 距大正元年八百五十三年 新編」という題箋が付されていることから、絵図が単体で取り扱われ、流通していたことを想像させる。また、新潟県立図書館所蔵の『温古の栞』一九篇の付録である「越後石油脈の略図」は、本誌とは独立して流通し、購入され蔵書となったことが知られる。
- 11 ①駒形彪「越後風俗志」によせて「越後風俗志」(復刻) 国書刊行会 一九九〇、②「新潟日報源流一三〇年 時代拓いて 越佐新聞略史」新潟日報事業社 二〇〇七

- 12 前掲(1)
- 13 「越後風俗志発兌の主意」『越後風俗志』第一輯 一八九五、前掲(11) ①
- 14 前掲(4)
- 15 原文では原則としてルビがふられているが全て外した。また、原文には基本的に句読点がないので、筆者が適宜、付した。旧かな遣いについては改めた。以下の引用についても同様である。
- 16 前掲(5)
- 17 『改版「温古の葉」(二)〜(四)』温古の葉刊行会 一九三六〜一九三七
- 18 前掲(7) ①
- 19 『新潟市史』新潟市役所 一九三四
- 20 『大日本名蹟図誌』第九編 越後国之物部 光彰館 一九〇二
- 21 吉田東伍『大日本地名辞書』富山房 一九〇二
- 22 大木金平『郷土史概論』坪谷嘉平治 一九二一。復刻である、大木金平『郷土史概論』大木幹雄 一九九九 には、大木の略伝が加えられ、郷土研究に携わった経緯についてもまとめられている。
- 23 池田雨工『越後古代史之研究』万松堂 一九二五
- 24 近年の地理学においても、「郷土」研究会編『郷土―表象と実践―』嵯峨野書院 二〇〇三 など、郷土に注目した研究成果が積み重ねられてきている。
- 25 前掲(17)
- 26 小林存「新潟県民俗学の小歴史」『高志路』一七五 一九五七
- 27 特に、雑誌「郷土研究」を大正二年(一九一三)に創刊したこと、新渡戸稲造を中心として結成された郷土会の主要メンバーであったことは、よく知られた事実であろう。
- 28 小林存「郷土教育に就いて 一」『高志路』二九 一九三七、同「郷土教育に就いて 二」『高志路』三〇 一九三七、同「郷土教育に就いて 三」『高志路』三三 一九三七、同「郷土研究の新視野 一」『高志路』六八 一九四〇、同「郷土研究の新視野 二」『高志路』六九 一九四〇など
- 29 前掲(3)

- 30 『深才郷土誌』 深才村役場 一九二九
- 31 『内務省新潟土木事務所沿革卜其事業』 内務省新潟土木出張所 一九三〇、なお本資料については、橋本晴夫氏に御教示頂いた。
- 32 『高志路』三 一九三五
- 33 村島靖雄「寛治偽図の作者と製作年代」『高志路』四 一九三五
- 34 金塚友之丞「康平寛治図偽作論(上)」『高志路』六 一九三五、同「康平寛治図偽作論(中)」『高志路』七 一九三五、同「康平寛治図偽作論(下)」『高志路』八 一九三五、同「的場山(康平寛治図偽作論補遺)」『高志路』九 一九三五、同「大木先生の学説動向」『高志路』一二 一九三五、同「大木先生の貝塚論を読む」『高志路』一四 一九三六
- 35 大木金平「康平寛治図は果して偽作なるか(一)」『高志路』一一 一九三五、同「康平寛治図は果して偽作なるか(二)」『高志路』一二 一九三五
- 36 『史蹟名勝天然紀念物調査報告 七』新潟県 一九三七
- 37 小林存『縣内地名新考』高志社 一九五〇